

日本語習得における中等教育と高等教育の連携効果
—ユウキ・ナツミとサキ・イケの表現力から—

伊 藤 恵美子

愛知東邦大学

日本語習得における中等教育と高等教育の連携効果

ーユウキ・ナツミとサキ・イケの表現力から¹ー

伊 藤 恵美子

目 次

1. はじめに
2. 台湾における日本語教育の歴史
3. 台湾国立高雄餐旅大学の沿革と特徴
4. 調査 (1)
 - 4-1. 調査方法
 - 4-2. 調査結果
 - 4-2-1. 教育目標
 - 4-2-2. シラバス
5. 調査 (2)
 - 5-1. 調査方法
 - 5-2. 調査結果
 - 5-3. 考察
6. おわりに

1. はじめに

従前は日本国内の大学は外国人志願者に対して日本語能力試験1級²（以下、1級と略す）合格を入学試験の要件としていたため³、上級の一指標とされている1級を取得した者しか通常は入学が許可されなかった⁴。そのため、日本語学校等の予備教育機関は1級合格を目標に予備教

〈注〉

- ¹ ユウキ・ナツミ・サキ・イケはいずれも本名ではなくニックネームである。
- ² 日本語能力試験は、2010年から新試験が開始された。新旧試験を比較すると、新試験のN1は旧試験の1級、新試験のN2は旧試験の2級、新試験のN4は旧試験の3級、新試験のN5は旧試験の4級とほぼ同じレベルであり、旧試験の2級と3級のレベル差が大きかったため、その間のレベルとしてN3が新設された（李，2011：102）。新試験が実施されるようになってからまだ2年ほどしか経っておらず、海外での認知度は高くない。よって、本稿は調査の協力先と同一の基準、つまり旧試験のレベル（1級・2級・3級・4級）を用いて議論を進める。
- ³ 21世紀初頭に「留学生受入れ10万人計画」の達成が見込まれるように、2000年以降入国管理局は留学・就学の入国・在留審査を大幅に緩和し、その結果2003年に日本で学ぶ外国人は10万人を超えた（文部科学省中央教育審議会大学分科会，2002；白石，2006）。この緩和政策により、日本語学校から大学に進む外国人も増加し、十分なレベルの日本語力を備えていない外国人の大学生誕生に拍車をかけた。
- ⁴ 日本の大学で日本人学生とともに日本語による講義を聞き、演習でプレゼンテーションを日本語で行い、卒業論文を日本語で書くことは、1級合格者でも決して容易でない。そのため、どの大学も入学を許可した外国人留学生の勉学を支援するため特別科目を開講して、日本語力の向上を図っている。

育として日本語の教育を行ってきた⁵。日本の大学に志願する外国人はアルバイトをしながら日本語学校に学習者として通うのが一般的であり、教室内外で日本語のシャワーを浴びる毎日を送るので、自然な日本語が身に付いていく。それに対して、海外での学習者は教室内で指導者が話す日本語を聞くに限られるので、インプット (input) 量が絶対的に不足し、習得に時間がかかるとされている。

ところが、2010年に開催された国際会議で⁶発表するため渡航した台北で会ったユウキの日本語は、中国語母語話者に特有の発音がほとんど聞かれず⁷、イントネーションや間の取り方が実に自然で聞き取りやすかった。そこで、本稿はユウキが在籍している台湾国立高雄餐旅大学（以下、餐旅大学と略す）の教育プログラムと、そこで学ぶ学生の表現力について探ってみた。

2. 台湾における日本語教育の歴史

台湾における日本語教育の過去から現在に至る道程を、日台の近代史を基に概観する。

1895年に締結された下関条約により、台湾は清国から日本に割譲された。台湾総督府は領台後間もなくして、日本語を話す児童（内地人）のために小学校を、日本語を話さない台湾の児童（本島人）のために公学校を設けた。1922年に新台湾教育令が公布されて本島人が内地人と共学できるようになり、本島人に対する国語教育、すなわち日本語教育が始まった（蔡，1989：333-348）。

1945年に、日本の敗戦を受けて台湾の行政権は中華民国に移った（相川，2010：73）。国民党政府は中国共産党との国共内戦に敗れ、1949年に台湾に戒厳令を發布して政権を移動した（中川，2009：45-62）。国民党政府は日本統治下の影響を取り除いて台湾の中国化を強制的に進め、国語は日本語から北京語に替わった（藤井，2003：145-161）。北京語同化政策が推し進められた台湾で大学に日本語学科が初めて設置されたのは1963年であり、国民党政府が日本の敗戦後の復興の速さに日本研究の重要性を感じて許可したと言われている（蔡，2010：9）。

蔡（2010）によれば、台湾における戦後の日本語教育の歴史は3つの時代に分けられる。第一は1963年から1979年で、教壇に立つ教師は単に日本語ができるというだけで、教授法に基づかず教師自身の学習体験を反芻しながら教えていた（蔡，2010：9-10）。

第二は1980年から1999年で、世界的な教授法の流れにやや遅れをとりながらも台湾にオーディオリンガル・メソッドが紹介され、言語学習の目的に異文化理解（日本文化理解）が取り上げら

〈注〉

⁵ 日本留学試験が2002年に導入されてから（日本学生支援機構）、日本語学校は日本語能力試験と日本留学試験の双方で学生が高得点を取れるように指導を行っている（日本語学校で教えている先生方の談話）。

⁶ 正式名称はICJLE2010世界日本語教育研究大会で、2010年7月31日～8月1日に台北市内の台湾国立政治大学で開催された。

⁷ 中国語母語話者には日本語の有声・無声の対立を中国語の有気・無気に置き換えて発音したり、日本語で意味の弁別に必要な長音・短音の区別ができなかったり、撥音や促音などの特殊音が明瞭に発声できなかったりする学習者が多い。

れるようになった。1996年に応用日本語学科が誕生し、日本語教育の制度が確立した。それまで日本語教育が行われていた日本語文学科が研究指向なのに対して、応用日本語学科は実務志向で経済・貿易などの専門科目が課されているが日本研究者の養成には至らない（蔡，2010：11-13）。

第三は2000年以降で、日本語教育が社会科学系の日本研究と分離した時期である。大学評価機関が日本語学科の修士課程における日本研究の廃止を勧告する一方で、2009年に国立政治大学に政治・経済を専門とする日本研究センターが設置され、人文系と社会科学系の分離が明確になった。日本語教育では、2003年に第二言語習得研究が台湾に導入され、指導方法も教師中心から学習者重視に変わりつつある。1996年に設置が認められた応用日本語学科は10余年で30校に増え、専攻分野を問わず学位さえあればスタッフとして採用される現状から問題が生じている（蔡，2010：14-17）。

3. 台湾国立高雄餐旅大学の沿革と特徴

本稿の分析対象者ユウキが在籍している台湾国立高雄餐旅大学の歴史は、1995年に設立された国立高雄餐旅管理専科学校から始まる。同校は日台間の観光客増加に対応するため、国家予算の措置によって、ホテルを中心とするサービス産業に従事する人材育成のために設立された2年制の技能養成機関であった（黄・紙矢）。2000年8月に同校は修業期間を4年間に変更して国立高雄餐旅学院と改名し、10年後の2010年8月1日に大学に昇格した（国立高雄餐旅大学「本学発展簡史」）。学校創立からわずか15年で大学に昇格、大学院も併設するまで急成長したのは、政治力は無論のこと⁸、卒業生が職場で活躍し教育効果が観光産業界で評価されている証左と言えよう。

餐旅大学の最大の特徴は就職に結びつく実践力の養成を教育目標に掲げ、ホテルマン・添乗員・調理師など各職種に必要な技能・技術の訓練を現場に即して行うためインターンシップが全員の学生に義務付けられていることである（黄学科長の談話）。同大学は4年制で、一部の専攻では大学院教育も行っており、昼間部に加えて社会人のために夜間部も開設されている。学部は、ホテルサービス学部、観光学部、調理学部の3学部である⁹（国立高雄餐旅大学「教学単位」）。ホテルサービス学部にはホテル学科、レストラン学科、マーケティング学科、応用英語学科、応用日本語学科の5学科が、観光学部には旅行学科、航空・運輸学科、リゾート学科の3学科が、調理学部には中華料理学科、西洋料理学科、製パン学科の3学科がある。学生数は、昼間部は約3,000名、夜間部を加えると約4,200名である。

〈注〉

⁸ 2年次の学部指定必修科目に「校内実習1」が配当されている（表2を参照されたい）。学内には実習旅館「群賢会館」が併設されており、筆者は調査期間中この付属ホテルに宿泊した。部屋の机には大学を訪れた第12代馬英九総統が大学の役職者とともに納まった写真が飾られており、国政トップに繋がる人脈を持つ幹部教職員の政治力が窺える。

⁹ 学部名・学科名は筆者の翻訳である。

4. 調査 (1)

4-1. 調査方法

2011年1月中旬に筆者が餐旅大学を訪問し、応用日本語学科の日本語科目担当者に対して調査を実施した¹⁰。先ず学科長の黄招憲先生に同学科の特徴と教育目標について、次に黄女玲先生、施文華先生、若生久美子先生、尾崎富枝先生に対して担当科目について、聞き取り調査を半構造的に行った。

4-2. 調査結果

4-2-1. 教育目標

餐旅大学はその設立経緯から理解されるように、職業に直結する技能の修得が教育目標である（黄学科長の談話）。そのため応用日本語学科は、学生全員に3年次に1年間のインターンシップを義務付けている（表3を参照されたい）。インターンシップの受入れ先は台湾内外にあり、台湾外では日本の大学への短期留学のほかに日本国内の日本企業での職業経験もある。同大学は国立ということもあり、必ずしも裕福な家庭の子女ばかりが進学しているとは言えない（施先生の談話）。よって、日本語力と向学心が高く経済的にも恵まれている学生に対しては交換留学の機会が、日本語力が高く自分の力で将来を切り開いていこうとする意欲的な学生に対しては日本で日本語の運用力に磨きをかけながら実務経験を積む選択肢が、渡日に躊躇する学生に対しては台湾内の企業が用意されている。つまり、学生は複数のコースから希望に叶う受入れ先を選択することができる。日本国内の受入れ先は、城西国際大学・京都学園大学・九州国際大学・徳山大学、および大阪新阪急ホテル・ホテル阪急インターナショナル・ホテル阪急エキスポパーク・第一ホテル東京・千里阪急ホテル・宝塚ホテル・沖縄残波岬ロイヤルホテルである（国立高雄餐旅大学「実習単位」、および施先生の談話）。

4-2-2. シラバス

前述した教育目標を達成するためにデザインされた学習プログラムを見ていく。以下、伊藤(2011)より1年次から4年次に開講されている科目の一覧表を挙げる。

〈注〉

¹⁰ 応用日本語学科所属の教員は台湾人4名と日本人2名である（国立高雄餐旅大学「師資簡介」）。スケジュールの関係で今回調査できなかった1名の台湾人教員の専門は日本文学で、コースデザインなどに関与する日本語教育の中心的存在ではないので（施先生の談話）、調査への影響はまったくないとは言えないが、議論を左右するほど大きくないと考える。

表1 1年生の開講科目

科目名称	前期単位・時数	後期単位・時数
【大学指定必修科目】		
英語（リーダー・ライティング）1・2	2・2	2・2
英語（ヒヤリング・スピーチ）1・2	2・2	2・2
ホテル会話1・2	2・2	2・2
（1科目選択）中国語言語能力訓練	2・2	2・2
or中国文学鑑賞		
or中国語作文		
（1科目選択）社会科学概論	2・2	2・2
or法学緒論		
or心理学		
orマスコミ学		
コンピュータ概論1・2	1・2	1・2
基礎統計学	2・2	
軍事教育1・2 ¹¹	0・2	0・2
体育1・2 ¹²	0・2	0・2
小計	13・18	11・16
【学部コア科目】		
観光学	2・2	
ホスピタリティ概論		2・2
ホスピタリティゼミ1		1・2
小計	2・2	3・4
【学科指定必修科目】		
日本語1・2	2・2	2・2
日本語作文I 1・2	2・2	2・2
レストラン日本語会話1	2・2	
日本語言語練習1・2	1・2	1・2
小計	7・8	5・6
【学科指定選択科目】		
華語（中国語）教育実務1	2・2	
メイクアップ&マナー	2・2	
3級日本語能力試験対策	2・2	
2級日本語能力試験対策2 ¹³	2・2	
華語（中国語）教育実務2		2・2
2級日本語能力試験対策1 ¹⁴		2・2
レストラン日本語会話2		2・2

出所：伊藤（2011）より転載

〈注〉

¹¹ 軍事教育は軍人により行われている授業であるが、単位としては認定されない（施先生の談話）。戒厳令は1987年に解除されたが（相川，2010：73）、キャンパスを闊歩している軍人を見かけ、日本と様相を異にする台湾の政治情勢を垣間見た思いがした。

¹² 体育も授業として行われるが、単位認定の対象科目ではない（施先生の談話）。

¹³ 前期に「2級日本語能力試験対策2」、後期に「2級日本語能力試験対策1」が配当されているのは、台湾の大学暦では前期授業期間は9月から翌年1月まで、後期授業期間は2月から6月までなので、例年12月上旬に実施される日本語能力試験の日程に合わせて、試験対策は後期授業から始めて前期授業で合格水準へと進めていく（施先生の談話）。

¹⁴ 注13を参照されたい。

表2 2年生の開講科目

科 目 名 称	前期単位・時数	後期単位・時数
【大学指定必修科目】		
英語（ヒヤリング・スピーチ）3	2・2	
人文：国際マナー	2・2	
社会：人間関係とコミュニケーション		2・2
美学概論	2・2	
世界の音楽		2・2
体育3・4	0・2	0・2
小 計	6・8	4・6
【学部コア科目】		
ホスピタリティゼミ2	1・2	
サービスマネジメント		2・2
小 計	1・2	2・2
【学科指定必修科目】		
日本語3・4	2・2	2・2
日本語作文Ⅱ1・2	2・2	2・2
ホテル日本語会話1・2	2・2	2・2
日本語文法1・2	2・2	2・2
レストランサービス実務		2・4
レストラン英語会話1	2・2	
ホテルサービス実務	1・2	
校内実習1		1・1
小 計	11・12	11・13
【学科指定選択科目】		
日本地理	2・2	
1級日本語能力試験対策1	2・2	
航空旅客運送とチケット業務	2・2	
ツーリズム経営と管理	2・2	
日本の歴史		2・2
1級日本語能力試験対策2		2・2
添乗員・ガイド実務		2・2
レストラン英語会話2		2・2

出所：伊藤（2011）より転載

表3 3年生の開講科目

科 目 名 称	前期単位・時数	後期単位・時数
【学科指定必修科目】		
インターンシップ1・2	10単位	10単位
小 計	10単位	10単位

出所：伊藤（2011）より転載

表4 4年生の開講科目

科目名称	前期単位・時数	後期単位・時数
【大学指定必修科目】		
歴史と文化		2・2
小計		2・2
【学部コア科目】		
経営学	2・2	
世界旅行と食文化	2・2	
小計	4・4	
【学科指定必修科目】		
日本語5・6	2・2	2・2
日本語応用文	2・2	
日本語翻訳	2・2	
校内実習2	1・1	
ゼミ製作	1・2	
日本語論文執筆方法		2・2
日本語通訳		2・2
海外研修		1・1
小計	8・9	7・7
【学科指定選択科目】		
日本語スピーチとディベートⅠ	2・2	
職場の日本語	2・2	
日本文学鑑賞	2・2	
ホテルマネージメント	2・2	
添乗員・ガイド日本語会話	2・2	
観光行政と法規	2・2	
ホスピタリティ実践とライセンス	2・2	
日本文化		2・2
ニュース・メディア日本語		2・2
エビエーション日本語会話		2・2
日本語スピーチとディベートⅡ		2・2
レストランマネージメント		2・2

出所：伊藤（2011）より転載

表1で顕著なことは、1年次から日本語能力試験対策の授業が開講されていることである。日本国内の大学で第二外国語を開講する場合、1年次では初級の授業、学年が上がるにつれて初中級から中級程度の授業を配当するのが一般的である。同様に、海外の大学の日本語学科の場合、1年次はいわゆるゼロ初級の授業¹⁵、2年次から3年次にかけて初中級に持っていき、留年せず

〈注〉

¹⁵ ゼロ初級は、その言語を習ったことはあるが忘れてしまったという学習者は含まれず、まったくの初心者レベルのことである。日本語学習では「あいうえお」の発声と文字の認識から始まるレベルを指す。

4年生に進級した学生が中級レベルに達する¹⁶。ところが、餐旅大学応用日本語学科では1年前期に日本語能力試験2級・3級合格に向けての対策授業がすでに行われている。この科目配当を可能にする背景に、台湾には日本語を専攻とする高校がいくつかあり¹⁷、同学科に入学する学生の大半は高校で日本語をすでに3年間勉強していることが挙げられる（尾崎先生・若生先生の談話）。

2003年より餐旅大学は統一入学測驗に参加し、応用日本語学科では日本語の入学試験を課さなくなることから、日本語がゼロレベルの学生も入学試験に合格するようになった（黄招憲）。同学科ではゼロ初級の授業が開講されていないので、入学時点で日本語力が不足している学生に対しては1年間休学して自習することを勧めている（黄学科長の談話）。つまり、教室で実際に授業を受ける学生は初中級レベル以上に限られ¹⁸、日本語能力試験対策の授業が1年次から行えるというわけである。

近年、日本語教育の国際学会でアーティキュレーションという術語が議論的になっている（當作，2010：133-139；當作，2012：60-61）。アーティキュレーションは漢語で「連関」と訳され、つながりや関連するクラス・プログラムの目標、活動内容、評価などの関連性を言う（當作，2012：58）。餐旅大学応用日本語学科に入学する学生の大半は高校で日本語をすでに3年間勉強していること、高校（もしくは休学中の自習）での習熟度を前提にして1年次から実践的な日本語の科目が配当されていること、そして学生の日本語能力がプログラムの狙いどおりにほぼ向上していることから、アーティキュレーションが達成されていると判断されよう。

次に表1・2を概観すると、「レストラン日本語会話1」「レストラン日本語会話2」「ホテル日本語会話1・2」など、国内の日本語教育では一般的でない科目が学科指定必修科目・学科指定選択科目に配当されていることに気づく。「レストラン日本語1」「レストラン日本語会話2」はレストランサービス（ホール）の会話、「ホテル日本語会話1・2」はレセプション・フロントサービス・ハウスキーピングで使われる会話が学習対象である（国立高雄餐旅大学「教師同仁系統」）。つまり、レストラン・ホテルの接客シーンで使われる日本語を会話形式で学習させていることが分かる。この場面シラバスは、「学科設立の主旨から言えば、当然のことながら、日本語教育の段階の中で学生のレベルアップの速度にあわせる形式で無理のないように『応用される対象である諸科学』の日本語による専門語彙の増加を促し」（黄招憲）と説明している教育思想の具現化である。同学科はホテルサービス学部の一学科で、日本語で対応できるホテルマン養成

〈注〉

¹⁶ 日本国内では上級は1級合格、中級は2級合格、初中級は3級合格、初級は4級合格程度とされている。日系企業は外国人の日本語力として1級合格レベルを求めており、外国人社員に日本語力を維持させるため毎年日本語能力試験を受験させていると聞く。

¹⁷ 中等教育で日本語学科のある高校は、商業高校36校と総合高校19校である（蔡，2010：8）。日本語専攻の高校は台湾全土にあるので、学生は高雄周辺に限らず台湾各地から進学する（交流協会，2010a：62-87）。

¹⁸ 休学者が復学する際の日本語力は特に規定されていないが、学生募集要項には日本語能力試験3級合格以上が望ましいと記載がある（施先生の談話）。

が使命であることから、典型的な接客場面で想定される会話を教えようと場面シラバスを採用したのであろう。

表3で示されているように、3年次の開講科目は「インターンシップ」のみで、これについては4-2-1. 教育目標で述べた。

表4から、4年次の特徴は「ホテルマネジメント」「添乗員・ガイド日本語会話」「エビエーション日本語会話」など専門職を養成する科目が多く開講されていることと、卒業論文が卒業要件でないことを挙げることができる。卒業論文の代わりに2単位の「日本語論文執筆方法」が学科指定必修科目として開講されているが、レポート書きのお作法を習う程度であり、日本語専攻の学科としては十分でないという声もある（黄女玲先生の談話）。

5. 調査（2）

5-1. 調査方法

調査（2）は、調査（1）と同時期の2011年1月中旬に筆者が餐旅大学応用日本語学科の2年次の学生を対象に、A・Bの2グループに分けて聞き取り調査を半構造的に行った。調査に協力してくれた参加者はAグループ6名、Bグループ4名である。両グループとも参加者の情意フィルターが下がるよう、円卓を囲んでリラックスした雰囲気の中で歓談しながら3時間程度のインタビューを行った。

参加者はAグループもBグループも、インターンシップで日本へ行くことを希望している学生である¹⁹。参加者の年齢は20才前後で、性別はAグループが男性2名と女性4名、Bグループは4名で全員女性である。日本語力は、Aグループは1級合格者2名と2級合格者4名、Bグループは1級合格者2名と2級合格者2名である。

まず一人ずつ自己紹介をしてもらい²⁰、それから日本語の勉強を始めたきっかけ・勉強方法・日本語の難しい点と易しい点・趣味・大学生活・家族・母語・インターンシップ・将来の夢・恋愛等々、一般的な話から個人的な話題へと心理的に深めて語りを引き出した。

5-2. 調査結果

調査は前述のとおりAグループ6名、Bグループ4名の合計10名全員に対して行ったが、ここでは対照的な傾向が見られた女性4名、Aグループのナツミ、Bグループのユウキとサキとイケ

〈注〉

¹⁹ 台湾では新学年のスタートは9月である。調査は2010年前期授業の終了直前に2年生に対して行ったので、学生は3年次、つまり2011年の授業開始時期の秋からインターンシップが始まる。学生は2年次の終わりにインターンシップの希望を大学側に提出し、受入れ先の面接を受ける。成績と面接の結果により、インターンシップの受入れ先が決定する。人気のある受入れ先は競争率が高いので、学生の希望が通らない場合もある（施先生、および学生の談話）。

²⁰ ユウキ・ナツミ・イケ・サキは、自己紹介で本名とともに個々の学生が自ら披露した日本風の名前である。本稿では彼女たちの意向、すなわち日本語を話すときの彼女たちのアイデンティティ（identity）を尊重して、中国語名ではなくニックネームを用いる。

について記す。

ナツミは、1級に合格していて文法・語彙のレベルが高い。さらに、発音も聞き取りも良く、未知の言葉を聞いても知っている語彙から推測ができる。つまり、ナツミは日本人と日本語で話すときに既知の知識を使って、自身が置かれた状況を乗り切ることができる。日本語は高校時代から専攻で勉強しており、1年間愛知県尾張地域の高校に留学した経験があるので、日本滞在中にストラテジー (strategy) を確立した可能性が高い。日本の伝統文化に興味があり、インターンシップは京都学園大学への交換留学を希望している。

ユウキは、本稿の冒頭で紹介したように、一言聞いて中国語母語話者とわかるような発音ではなく、極めて自然な日本語を話す学生である。日本語能力試験は2級に合格している。ユウキもナツミと同様に高校で日本語を専攻し、高校時代に1年間愛知県三河地域の高校で過ごした経験がある。ユウキは1/4日本人で愛知県に日本人の血縁者がいるが、遠縁の日本人の日本語を初めて聞いたとき教室で習った日本語と異なる三河方言だったので分からなかったと、留学経験を話してくれた。

サキは1級合格者であるだけでなく、成績は学科のトップクラスで非常に真面目な学生である。質問に対して物静かに「はい」と答え、依頼した事務手続き等を正確に行える。しかし、学習事項にないこと、例えば大学の授業では日本事情には触れるが台湾事情については勉強しないので、筆者が台湾で見聞きしたことを尋ねても、サキはうまく説明ができない。また、知っている語彙を使って相手に自分の考えや言いたいことをうまく伝えることができない。

イケは2級合格者である。世界に輸出できる文化産業として日本のゲーム・アニメ・マンガなどのポップカルチャーが話題になり、日本政府もクール・ジャパン室を設置して支援を開始した (経済産業省, 2010)。イケはこのクール・ジャパンの申し子で、マンガから日本語に興味を持った学生である。他大学で日本語を専攻しているお姉さんの影響もあり、教科書に出てくる語彙にとどまらず流行語や若者言葉までよく知っていて、会話で効果的に使える。イケは、筆者の台湾に関する疑問に対して語彙や一般知識など自分の能力を駆使して説明を試み、筆者が理解するまで説明を止めない。

5-3. 考察

インタビューをまとめると、ユウキとナツミは高校時代に1年間交換留学生として日本に滞在した経験がある。それに対して、サキとイケは日本留学の経験がない。日本語力のレベルは、ナツミとサキは1級合格、ユウキとイケは2級合格である。

ナツミとユウキが自然な日本語を話し、未知の言葉を聞いても即座に対応できるのは日本留学で培ったストラテジーのおかげであろう。イケの発話力はマンガを通して、言い換えればストーリーの展開が知りたくてマンガを読むうちに、その登場人物を介して自然な日本語を身につけていったのであろう。つまり、イケはポップカルチャーに対する文化的な動機づけ、Gardner and MacIntyre (1991) の言を借りれば統合的動機づけ (integrative motivation) により言語学習が成功した例である。Gardner and MacIntyre (1991) によれば、統合的動機づけも道具的動機づけ (instrumental motivation) も第二言語学習を促進するが、道具的動機づけが影響を与えるのは学習者がゴールに到達するまでであるのに対して、統合的動機づけは学習言語が話されている集団に学習者が好意を持ち、文化を理解し、その一員になりたいと思うので、長期的な学習につながる点が異なる (Gardner and MacIntyre, 1991 : 70)。

では、どうして1級合格者で、成績が学科トップのサキは日本語で言いたいことをうまく表現できないのだろうか。筆者の質問に対して、イケは既知の語彙を使って様々な角度から説明に挑戦したが、サキは知らない日本語を使わなければいけない文脈に遭遇すると黙ってしまった。外国語学習には成功する性格があり、内向的な人より外向的な人のほうが上達しやすい、と一般的に思われている。日本人英語学習者 (男性・女性) を対象にした研究では、内向的な学習者と外向的な学習者とで英語の到達度に統計的な有意差は見られなかったが (Busch, 1982 : 128)、男性学習者に限定すれば有意差が認められた (Busch, 1982 : 128-129)。本稿での考察対象は前述のとおり全員女性で、サキとイケを比較すれば、前者は内向性、後者は外向性が認められる。日本語教育に携わっている筆者は、サキの表現力がイケのそれを上回っているとは経験知から思えない。しかし、本稿は学生の発話に対して探索的な検討の段階にあり、データの詳細な分析には至っていないので、日本語学習と学習者の適性 (内向性・外向性) については稿を改めることとして、ここでは教育プログラムの影響を指摘したい。

教授法の世界的な潮流としては、長い歴史を持つ文法訳読方式、1960年代までのオーディオリンガル、その後はコミュニカティブ・アプローチの時代に入り、例文暗記は人気なくなった。ところが、表1～2を見ると「レストラン日本語会話1」「ホテル日本語会話1・2」などの科目名称、および『旅館実務日本語会話』などの教科書を見る限り、まだ暗記中心の授業が主に行われていることが分かる。

敬語については、家族・同僚・上司を相手とする3場面を同時に提示して、スピーチレベルシフト²¹が起こる状況を理解して練習する授業が一部ではあるが、取り入れられている (黄女玲)。待遇表現は中国語と日本語とで異なるので、場面ごとに違う表現をバラバラに覚えさせるより、体系化した機能シラバスで練習させたほうが教科書で網羅できない場面に遭遇しても学習者は応

〈注〉

²¹ スピーチレベルは丁寧さに関する文体のレベルのことであり、スピーチレベルシフトは場面・相手など様々な条件によって、デス・マス体からダ体へ、ダ体からデス・マス体へとスピーチレベルを変化させることを言う。

用が利く²²。日本語の待遇表現の全体像を理解し、あらゆる状況に対応できる日本語力を養成するために、さらに限られた授業時間で学習の効率を高めるためにも、学生主体で表現力が豊かになる授業が増えることが望ましい。

6. おわりに

本稿は、台湾国立高雄餐旅大学応用日本語学科で日本語を専攻する4名の女子学生を対象に、日本語の表現力について検討した。調査の結果、次の2点が見出せた。第一は、高校時代に留学経験のある学生のほうが留学経験のない学生より、自然な日本語を話すことである。第二は、留学経験がなくても教室の外でも積極的に日本語に接している学生は、既習の語彙と知識を活用して現段階の日本語力より一段階複雑な内容が話せることである。

同学科は1級合格が卒業要件で、かつゼロ初級の授業が非開講のため（施先生の談話）、日本語力が初中級以上の学生のみを事実上受け入れ、1年次から観光産業に特化した会話教育とともに日本語能力試験対策を行い、3年次に1年間のインターンシップで経験を積ませている。4年間で一定レベルの効果が上がる教育プログラムの背景として、日本語専攻の高校生が入学生の大半を占めていることが挙げられる。中等教育における日本語専攻科の設置は第二外国語教育普及政策である「推動高級中學第二外語教育政策」に負っており（交流協会, 2010b: 23）、政府の教育政策による中等教育と高等教育の連携が効果を上げている。つまり、アーティキュレーションがうまく機能していると見ることができよう。

最後に、1996年以降に設置された応用日本語学科のスタッフは専攻分野を問わず学位さえあれば採用されるとの批判が出されており（蔡, 2010: 14-15）、同学科も日本語教育が専攻の教員が少数の現状に鑑みれば、教師自身の学習体験を反芻する半世紀前の教授法ではなく、理論を踏まえた専門家による最先端の日本語教育研究の知見を採り入れたコースデザインが待たれる。

付記

本稿は平成23～25年度科学研究費補助金（基盤研究（C））「アジアの言語のポライトネス：台湾人の場合」（課題番号：23520641）の助成を受けて行った研究成果の一部である。データ収集にご協力くださった台湾国立高雄餐旅大学応用日本語学科の黄招憲学科長、尾崎富枝先生、黄女玲先生、施文華先生、若生久美子先生、および学生の皆さん、ならびに台北での資料収集にご尽力くださったYAMASA言語学院修了生の林君玲氏に厚く感謝申し上げます。

〈注〉

²² 注8で述べたように、筆者は調査中、付属ホテルを利用した。初日から4日目の朝まで快適なホテルライフであったが、4日目の夜バスタブにお湯を入れようとしたら、濁った水が出てきた。フロントに連絡したところ、当番の研修生はThis is the first time. I'm sorry. としか言えず、不測の事態に日本語で謝罪するなど適切な対応ができなかった。事故により、場面シラバスの限界が計らずも表出したのである。

参考文献

- 相川真佐夫. 2010. 「台湾における3つの言語政策」 山本忠行・河原俊明(編著)『世界の言語政策第3集: 多言語社会を生きる』くろしお出版55-76.
- Busch, Deborah. 1982. Introversion-extraversion and the EFL proficiency of Japanese students. *Language Learning*, 32(1): 109-132.
- 藤井(宮西)久美子. 2003. 『近現代中国における言語政策: 文字改革を中心に』三元社.
- Gardner, R. C. and MacIntyre, P. D. 1991. An instrumental motivation in language study: Who says it isn't effective? *Studies in Second Language Acquisition*, 13: 57-72.
- 伊藤恵美子. 2011. 「台湾国立高雄餐旅大学応用日本語学科における日本語教育: 国家政策による観光産業の人材育成」『下関市立大学論集』55(1): 107-114.
- 黄招憲・紙矢健治・尾崎富枝. 2010. 『旅館実務日語会話』到良出版社.
- 中川仁. 2009. 『戦後台湾の言語政策: 北京語同化政策と多言語主義』東方書店.
- 李在鎬. 2011. 「国際交流基金レポート14 日本語能力試験の挑戦: 新しい日本語能力試験を例に」『日本語学』30(1): 95-107.
- 蔡茂豊. 1989. 『台湾における日本語教育の史的研究: 1895年~1945年』東呉大学日本文化研究所.
- 蔡茂豊. 2010. 「台湾における日本語教育と日本研究」『2010ICJLE世界日本語教育大会予稿集』8-17.
- 當作靖彦. 2010. 「中等・高等教育における日本語教育のアーティキュレーションの達成: 今後の支援活動・交流活動のアクションプラン」『2010ICJLE世界日本語教育大会予稿集』133-139.
- 當作靖彦. 2012. 「グローバル社会を創る日本語教育: アーティキュレーション(連関)を通して見た世界の日本語教育」『2012年日本語教育国際研究大会プログラム』58-59.
- 當作靖彦. 2012. 「世界と日本をつなぐ日本語教育: 留学生のための日本語教育のアーティキュレーション(連関)」『2012年日本語教育国際研究大会プログラム』60-61.
- 経済産業省. 2010. 「クール・ジャパン室の設置について」.
<<http://www.meti.go.jp/press/20100608001/20100608001.pdf>>2011年3月2日参照.
- 黄女玲. (No date). 「ホスピタリティ産業の学生のための初級日本語テキストへの考察: 日本語待遇表現の理解と使用を中心に」.
<<http://web.nkuht.edu.tw/GHE/new-web/>>2011年2月16日参照.
- 国立高雄餐旅大学. (No date). 「本校発展簡史」.
<<http://web.nkuht.edu.tw/onweb.jsp?webno=33333333:7>>2011年2月16日参照.
- 国立高雄餐旅大学. (No date). 「実習単位」.
<<http://web.nkuht.edu.tw/onweb.jsp?webno=3333330654>>2011年2月16日参照.
- 国立高雄餐旅大学. (No date). 「教学単位」.
<<http://web.nkuht.edu.tw/onweb.jsp?webno=333333337:>>2011年2月16日参照.
- 国立高雄餐旅大学. (No date). 「教師同仁系統」.
<http://webap.nkuht.edu.tw/twacher/class/query_teacher_timefl.asp>2011年1月13日参照.
- 国立高雄餐旅大学. (No date). 「師資簡介」.
<<http://web.nkuht.edu.tw/onweb.jsp?webno=333333000:>>2010年11月13日参照.
- 交流協会. 2010a. 『2009年度台湾における日本語教育事情調査報告書: 初等・中等教育機関リスト』.
<[http://www.koryu.or.jp/nihongo/ez3_graphics.nsf/0D3222A03F61738749257791002AADFF/\\$File/62-87.pdf?OpenElement](http://www.koryu.or.jp/nihongo/ez3_graphics.nsf/0D3222A03F61738749257791002AADFF/$File/62-87.pdf?OpenElement)>2010年11月24日参照.
- 交流協会. 2010b. 『2009年度台湾における日本語教育事情調査報告書』.
<[http://www.koryu.or.jp/nihongo/ez3_graphics.nsf/DBBDC3186266DE0049257791002967FD/\\$File/1-24.pdf?OpenElement](http://www.koryu.or.jp/nihongo/ez3_graphics.nsf/DBBDC3186266DE0049257791002967FD/$File/1-24.pdf?OpenElement)>2010年11月24日参照.

- 黄招憲. (No date). 「餐旅類における日本語教育：各大学と餐旅類の専門日本語科目の状況を中心に」.
<<http://web.nkuht.edu.tw/GHE/new-web/>>2011年2月16日参照.
- 黄招憲・紙矢健治. (No date). 「国立高雄餐旅学院における日本語教育（1996-2005年）の変遷」.
<<http://web.nkuht.edu.tw/GHE/new-web/>>2011年2月10日参照.
- 文部科学省中央教育審議会大学分科会. 2002. 「当初の『留学生受入れ10万人計画』の概要」.
<http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/007/gijiroku/030101/2-1.htm>2011年2月10日参照.
- 日本学生支援機構. (No date). 「日本留学試験とは」.
<http://www.jasso.go.jp/eju/whats_eju.html>2011年3月2日参照.
- 白石勝己. 2006. 「留学生数の変遷と入管施策から見る留学生10万人計画：平成18年度留学生数は昨年比4000人減少」『ABK留学生メールニュース』アジア学生文化協会.
<<http://abk.or.jp/asia/pdf/20061225.pdf>>2011年2月10日参照

受理日 平成24年9月29日